

一九五〇年代、

在日朝鮮人にとって

とりわけ困難な状況下に、

詩をもってその時代と

真摯に向き合った

若き詩人たち。

〈在日文学〉の原点であり、

サークル詩運動の貴重なる証言！

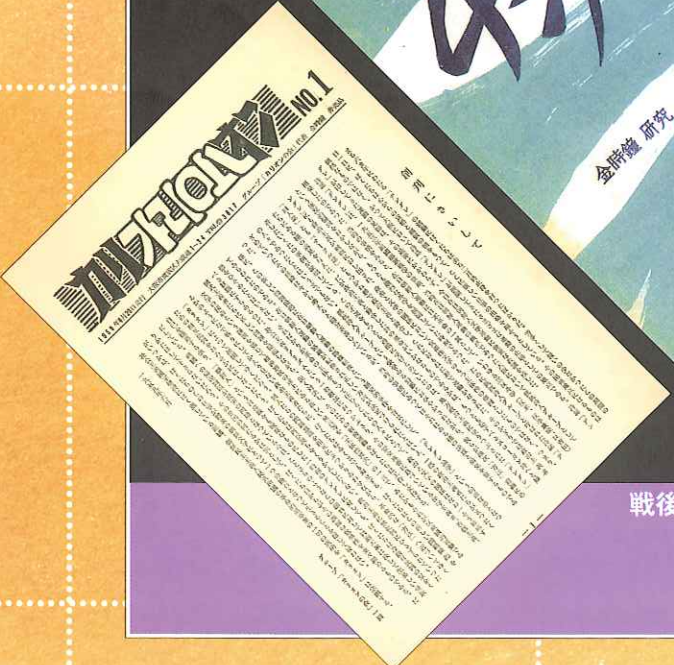
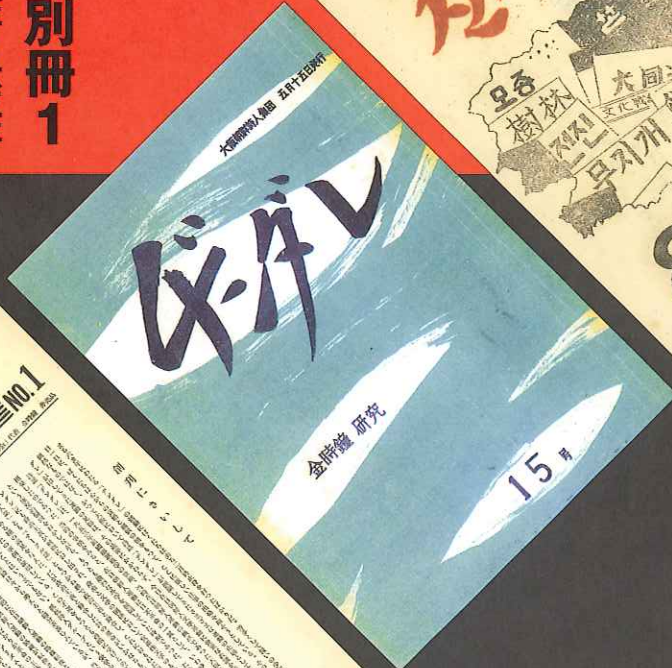
大阪朝鮮詩人集団機関誌

ヂンダレ！ カリオオン

全巻

全3巻十別冊1

一九五三年～六三年



付録 ● 『原点』(第一号・梁石日個人雑誌)、

『黄海』(創刊号)

A5判・上製・総九二二頁

本体揃価格 ● 三六、〇〇〇円十税

解説 ● 宇野田尚哉、細見和之

鼎談 ● 金時鐘、鄭仁、梁石日

戦後文化運動雑誌叢書⑥

不二出版

復刻に
寄せて
金時鐘

半世紀もまえのサークル詩誌『デンダレ』が復刻されることに、どれほどの価値と意味があるのか分からないが、版元になってくださる不二出版と復刻の仲立ちをしてくれた宇野田尚哉神戸大学准教授の熱意にほだされて、復刻版を出すことに同意した。

それでもなお気遣いはつきまわっている。詩誌としての中身の薄さもあることながら、『デンダレ』に込められている私の青春が苦いのである。

『デンダレ』は朝鮮戦争さ中の一九五三年二月に創刊された。超大国アメリカと戦っている北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国の正当性を広く知らしめる一環としての、文学的場づくりとして『デンダレ』は始まった。正真そのときまでは北朝鮮はまざりもない、絶対正義の社会主義祖国であった。米軍政下で暴圧の限りをつくして作り上げた「大韓民国」の成り立ちを生身をもって知っている私には、親日派、民族反逆者をいち早く処断し、農地改革からソ連軍撤退までやりとげた抗日の英雄、金日成將軍の果敢な政治体制を幼くも自分の生きるよすがのように私は信奉した。

当時私は在日同胞組織の文化関係の常任活動家であった。『デンダレ』の集まりにも当然、私のせいで組織規制がかかっていた。文学芸術は組織（政治）に従属するという、あの社会主義写実主義の押し付けであった。スローガン調の詩に会自体が倦んでいた。

五五年手の平を返すが如く在日朝鮮人運動の路線が転換され、現今の朝鮮総連に取って変わった。政治主義、画一主義は金日成神格化を伴っていっそう強化され、日本語での表現活動は民族的主体性の喪失として疎まれ、「金時鐘」は勢い思想悪のサンプルにされていった。書くことの主体性によりやく目覚めはじめていた『デンダレ』はそうして四散した。鄭仁、梁石日、金時鐘だけがそれでもがいた揚句、「デンダレ残党」となって今日に及んだ。復刻されることはやはり、なにがしかの時節変動の物証とはなるうか。



創刊のことは

デンダレは 美しい花、
やさしくて、きれいな花、
赤い赤い 燃えるような花だよ、

祖国の野には 涙山咲いているよ、
焼けた山にも、枯れた川辺にも、
けがれることなく 咲きほこつてゐるよ、

赤い赤い デンダレの花、
黒い黒い 祖国の地肌にも
赤く赤く 萌え出るのだよ、

晴まれても、しだかかれても、
季節を忘れない 私、私のデンダレ、
日本の地にも、この花の咲くのを 望んでみたよ、

※朝鮮の山野に もつとも多く咲く花
つまをの一言で、 朝鮮の国花、

詩とは何か？ 高度の知性を要するものか？ どうも私には手なれぬ。だが、誰かしく考えずばる必要はない。最早私達は、喉元をきつて出るこの言葉だ、どうしようもない。

生のまゝの血魂のような怒り、しんぞこ絶えさつたものの、メソソ、のさばるさるさる。少くとも、夜鶯（ロシニヨル）でないことだけは事実だ、私達は私達に叩いた、本音の歌を歌いた。

會つて、シャトー・ドゥ・コントの深い苦の中を叩いて、寂滅の呻き声と、鼓膜のうなりは、今日のこの世に、なほも強く、鳴り響いていられないか？ いくと解散されても、なほ、新しい鉄槌は造られてゐる。

私達の書く詩が、詩でないならならぬ、百年もの、鏝の下に生きて来た私達だ、夢や夢や叫びが声は、詩以上の真実を伝へ得るだろう、私達はもう、暗におびえてゐる絶望の子ではない。悲しみのために、アリアンは歌はないだろう、涙を流すために、トラジは歌はないだろう。歌は歌詞の改革を告げている。

さあ来よ、前進だ、 鹿をくみ、高らかに不死鳥を歌い続けよう、この胸底の、デンダレを咲かし続けよう。

朝鮮詩人集団 万才！
一九五三年二月七日 輝と建軍節を前にして 朝鮮詩人集団

目次

デンダレ 16号

婦女誌雑記 金平善(26)
サラン・サン 姜尚祐(27)
チヨルプ・アム

私の作品の場と「流民の記憶」 金時鐘(2)
小野十三郎先生訪問記 洪允杓(14)

太陽の季節に反発して 呉興在(31)
合評ノート(32) 会員消息(32)
編集後記(33)

鳩と空席 洪允杓(9)
少年・蠅 鄭仁(10)
蟬の歌・海の記憶 權東沢(11)
蟲天・他 梁正雄(12)
白い手・インディアン狩り 金時鐘(17)
夜学生 姜春子(21)
沖繩・街の片隅で 權敬沢(22)
不安 金仁三(23)
蟹の科白 成子慶(24)
四等飯 金啄村(25)
表紙 李景齋



『デンダレ』のメンバー、1957年頃、大阪泉南の山手にて(写真提供=金時鐘)

自分の朝を
おまえは、欲してはならない。
照るところがあればくもるところがあるものだ。
崩れ去らぬ 地球の自転をこそ
おまえは、信じていれたい。

陽は おまえの 足下から昇つてゐる。
それが 大きな 弧を描いて
その うらはらな おまえの足下から流れてゆくのだ。
行かないとこころに 地平があるものではない。
おまえの立つてゐる その地点が地平だ。
まさに 地平だ。

遠く 影をのびして
傾いた夕日に、サヨナラをいわねばならない。
新しい 夜が待つてゐる。

（詩集「地平線」より）

私の作品の場と「流民の記憶」

私は今、途方もない困難におつかつてゐる。これから書こうとすることが、もし体のいい自己弁護であったり、または十五号に組んでくれた私の研究特集に対する反論のための反論であったりした場合は、私は不適切なものを免れないだろう。その前にまず、読者はその必要性を無視してしまつたらう。何故なら、通常そのらの文学議論を交すには余りにも事は深刻すぎる。期待する読者があつて、私の小論を待つてゐるとしたら、それは当然「流民の記憶」にまつわる金時鐘の創作体験であるはずだからだ。

私もそれ以外のことは必要としない。私がいまきよく洗つた唇にシヤツポを脱いだのは、まさにこのことについてであつた。十五号における彼の指摘が、詩集『地平線』を別冊する上に重要であつたというよりも、



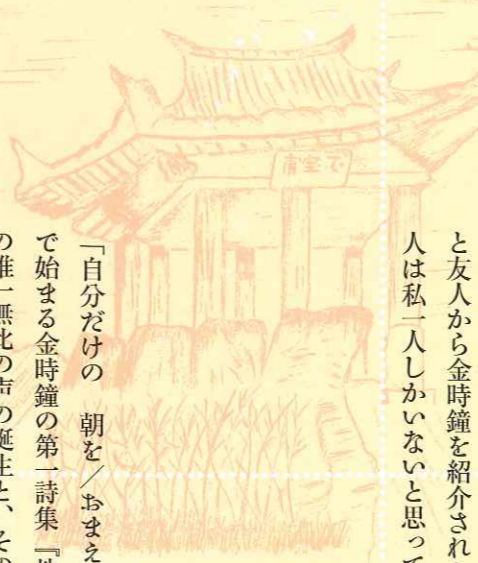
遠い記憶

● 梁石日 (作家)

総目次によると、私が『ヂングレ』に参加したのは、一九五六年五月十五日発行の十五号からである。ということには、その二、二ヶ月前に私は金時鐘と出会っていることになる。金時鐘との出会いは、いまでも鮮明に憶えている。ある日、朝鮮人長屋が密集している生野の幸森小学校近くにある古い木造二階建ての病院に盲腸で入院している友人を見舞いに行ったところ、二人部屋の片方に金時鐘が入院していた。神経質で律義そうに見えたが、

「このひとはな、詩人やねん」

と友人から金時鐘を紹介された私は驚いた。なぜなら、在日に詩人は私一人しかいないと思っていたからだ。そしていきなり議論



〈今ここ〉を「地平」に変える言葉たちの激闘

● 鶴飼 哲 (橋大学教授)

「自分だけの 朝を／おまえは 欲してはならない」。この言葉で始まる金時鐘の第一詩集『地平線』の「自序」は、一人の詩人の唯一無比の声の誕生と、その声がそこから生まれ出た他の声たちとの、厳しく熱い討論の共震とともに伝える。「崩れ去らぬ地球の廻転をこそ／おまえは 信じていけばいい」。そう請け合う地球の自転への信仰告白は、その表向き樂觀の背後に、異端裁判の法廷に立つガリレイの覚悟を秘めていたのかも知れない。

「行きつけないところに 地平があるのではない／おまえの立っている その地点が地平だ」。この詩行こそは、大阪朝鮮詩人集団詩誌『ヂングレ』同人たちの、集団的宣言にもひとしい表現であったろう。民族組織の定型化した希望も、その外部に自由を幻

集団と工作者のメディア

● 米谷匡史 (東京外国語大学准教授)

『ヂングレ』『カリオン』は、熾烈な路線闘争と亀裂をへて、満身創痕の孤絶のなかで傑出した表現者たちをうみだしていった。意識と表現の「定型化」に抗して、「流民の記憶」を掘り下げながら、新たな表現を見出していく悪戦苦闘の営み。そこには、「在日」の思想・文学が生まれ出る原点がある。

そして同時に、この雑誌は、在日朝鮮人が「集団」として主体性をくみかえ、自らの表現を模索していく文化運動のメディアであった。そこには、「工作者」がいた。組織と民衆、分断された祖国朝鮮と日本、そして朝鮮語と日本語の間で、幾重にもおりかさなる分裂。冷戦と朝鮮戦争下の危機のなかで、抑圧・暴力に包

になった。

池で乗っていたボートが転覆して男だけが岸に泳ぎ着き、女は溺死する。この場合、女を置き去りにした男の罪を問えるのかという議論だった。瑣末で稚拙な議論だったが、その頃、実存主義に傾倒していた私は、人間の存在の不条理についてえんえんと金時鐘にからんでいた。のちに金時鐘は「ボート論」と言っているが、それを契機に、私は『ヂングレ』に誘われて参加した。ときに定時制高校に通学していた私は十九歳、処女詩集「地平線」を出版して間もない金時鐘は二十七歳、気の遠くなるような若さだった。あれから五十三年の歳月が流れた。

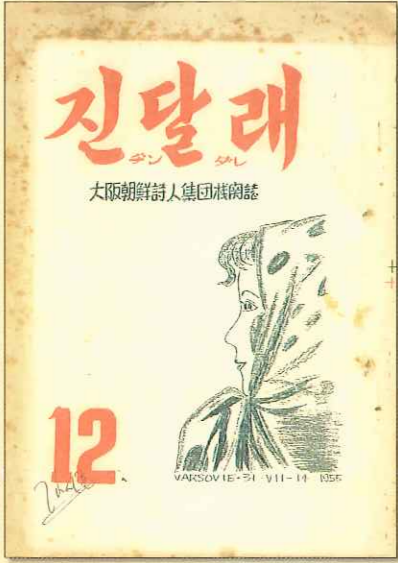
想する個人主義的な志向も拒否し、ただ「ま新しい 夜」だけを求めた不遜な魂たちの、強靱な内視のヴェクトルがここに示されている。

この言葉が記されて半世紀以上の時が流れた。だが、この「地平」はいまも生々しく開かれたままだ。それはひとつには日本社会の停滞のためである。しかしもうひとつには、あの時代の朝鮮人の若い知性が切り開いた自由の思考に、あらゆる〈今ここ〉を照射する未曾有の力がはらまれていたためでもある。『ヂングレ』『カリオン』に加えて梁石日の個人誌「原点」をも含む激闘する表現群の復刊は、歴史が大きく動き出した今、私たちの「地平」をみつめ直す精神の視力を鍛えてくれるだろう。



囲される日常。そのなかで、「集団」を形成しながら、たがいを触発し、抵抗・連帯を求めてもがき苦しむ人々の営み。「無名」の男／女たちが、手探りで「集団」的表現を追い求めた軌跡として、この雑誌を読んでみたい。

ガリ切りされた誌面をひろげ、声に出して、できれば「集団」で、『ヂングレ』を読んでみよう。そこには、自らの表現を求めて苦悶する人々の声が響いてくるだろう。そして、錯綜する亀裂に橋を架けようとした「工作者」の眩さが洩れ聴こえてくるだろう。その声をさまざまに響かせながら、「工作者」の手からバトンを受け取り、たがいを工作し、また誰かに手渡そうではないか。



夜を賭けて

梁石日

たらりと、だれかがついている。風は静まりかへり。地上の一切の、生命が死に絶えたかのごとく寂寥の耳鳴りがひびいてくる……。

夕暮の運河のたるんだ映像を見つめていた。水中メガネをかけ。明度一〇度の中をもぐつていくと鋼鉄に挟まれた僂僂男が強いメタン瓦斯の噴きでる泥へのめりこみ。髪の毛が、藻のようにむらがりなびいていた。そいつをロープで巻きつけ、釣りあげる。クロイド状に腐爛した眼球は燃える夕陽を浴びて溶けはじめた。澄みきった大空へ。中之島製鉄の黒煙がゆつくりひろがる。俺は、恐るべき現実を追いつめられて。テイゼの泥沼を舟で渡ると。数十本の巨大な煙突が聳えつつ造兵廠跡にやってくる。空間の気流は粘液のように焼けただれた鉄骨や爆破した煉瓦やぼろぼろとしげる雑草をとりまいてる。しだいに、霧がおおいかぶさる。地下に眠りつづけていた國籍不明者たちが重い石棺の蓋を押しあげツルハシを肩に、つきからつきへと。廢墟の地上に現れた。太陽は沙漠の涯に燃えつき。あおみどろの天幕が。たらりと、だれかがついている。風は静まりかへり。地上の一切の、生命が死に絶えたかのごとく寂寥の耳鳴りがひびいてくる……。

「第1号」より

付録内容縮小見本

黄海

創刊号

原点

金史良試論

Table with 2 columns: Author and Page Number. Includes entries like 趙俊...4, 許金子純訳...22, 鄭仁...38, etc.

「原点」より

一九一〇年の日韓併合案、半世紀にわたる充分な重量ある歴史と苦悩の歳月を経て、ようやく在日朝鮮人という歴史的現象が究明されつつある。おそろしく在日朝鮮人という存在は時間の問題に還元されるだろう、とはいえず、いま多くの試練と困難な条件が積たわっている。われわれの精神が、とも強靱な進化の方向に向かつて自らの意識力をかき立てるとき、自己愛から客観的認識への飛躍なイメーシのプロセスを経験しなければならないだろう。そこにはあらゆる論議の危険性が待っている。しかし、いまのわれわれにとっても、必要な思考は論理的究明であり価値判断である。心情と情緒の感情的規範において、われわれの過去はほとんど無制限に野放しされてきた。朝鮮の無法を激しく、北朝鮮の

自己矛盾を去るべく意識とは無縁である。かかると命懸けからはいかなる価値判断もくすぶることができない。のみならず、現段階においては、それらは朝鮮民族をより抽象化するリアクションがある。彼らが、機に口にする言葉、すなわちリベラルが、この中間的な存在論に介入してくる。この存在論には二つの危険性がある。一つは虚無主義の情念であり、いま一つは宗教である。人間の情念の中でしめる宗教の位置は、二十世紀半における今日でも、依然として強力であり、それは国家理性に感服し、ときとして政治理念と主権を認めた。強背反の状態が必然と社会現象をなしていることがある。今日のブルジョア社会的精神的支柱はリベラルをもつて、リベラルこそがわれわれにとって最大の関心であり、救済の真理への近道であると叫んでいる。だが、リベラルな状態とは何なのか。抽象的なリベラルが存在しうるだろうか。宗教という一つとも

「戦後文化運動雑誌叢書」復刻版のご案内

1 南風書房発行/北川晃二編 『昭和二年(一四四年刊)』

午前 《全五巻・別冊二》

- A5判・上製・総一、一〇四頁
別冊II解説・回想・総目次・索引
解説II狩野啓子・長野秀樹・深野治
揃定価II九〇、〇〇〇円十税
推薦II大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5297-8



2 三帆書房発行/大西巨人ほか編 『昭和二年(一三三年刊)』

文化展望 《全三巻・別冊二》

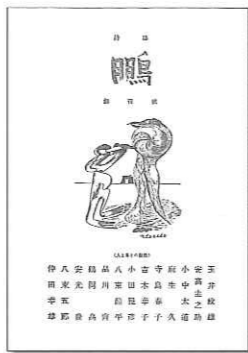
- B4判並製・B5判上製・総六六六頁
別冊II解説・総目次・索引
解説II赤塚正幸・大西巨人・狩野啓子
揃定価II二八、〇〇〇円十税
推薦II大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5304-4



3 鵬同人社ほか発行/岡田芳彦・出海溪也ほか編 『昭和二〇年(一五五年刊)』

鵬・ピオネ・藝術前衛 《全三巻・別冊二》

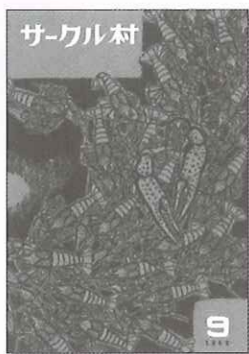
- 菊判・上製・総八八六頁
別冊II解説・総目次・索引
解説II赤塚正幸・麻生久・出海溪也
揃定価II三五、〇〇〇円十税
推薦II大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5309-5



4 九州サークル研究会発行 『昭和三三年(三六六年刊)』

サークル村

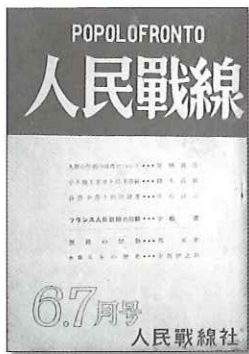
- 《全三巻・付録一・別冊二》
A5判・B5判・上製・総一、九四六頁
別冊II解説・回想・総目次・索引
解説II井上洋子・坂口博・松下博文
揃定価II六五、〇〇〇円十税
推薦II有馬学・池田浩士・上野千鶴子・鶴見俊輔
二〇〇六年六月刊 ISBN4-8350-5715-5



5 人民戦線社発行/中西伊之助主宰 『昭和二〇年(一四四年刊)』

人民戦線 《全五巻・別冊二》

- A5判・上製・総一、七〇〇頁
別冊II解説・総目次・索引
解説II勝村誠・秦重雄
揃定価II六八、〇〇〇円十税
推薦II高柳俊男・西田勝
二〇〇六年一月刊 ISBN4-8350-5737-6



*「戦後文化運動雑誌叢書」の叢書名は「チンダレ・カリオン」復刻版刊行にあたり、新たに付しました。

大阪朝鮮詩人集団機関誌

ヂンダレ・カリオン

全3巻+別冊1

※「ヂンダレ」「朝鮮つづじ」の意
※「カリオン」は「たて髪、黒い白馬」の意

●復刻版収容内容

第1巻 『ヂンダレ』 大阪朝鮮詩人集団刊 第一号(五三年二月)〜第一〇号(五四年三月) 総334頁

第2巻 『ヂンダレ』 大阪朝鮮詩人集団刊 第二号(五五年三月)〜第二〇号(五八年二月) 総406頁

第3巻 『カリオン』 グループ「カリオンの会」刊 第一号(五九年六月)〜第三号(六三年二月)+附録 総182頁

付録Ⅱ 『原点』(第二号・梁石日個人雑誌、六六年六月)、『黄海』(創刊号、六七年八月)、『第3巻の巻末に収録』

●体裁——A5判・上製・総九二二頁(「カリオン」一〜二号の原誌サイズはB5判ですが、A5判に縮小)

●別冊——解説・鼎談・総目次・執筆者索引

別冊のみ分売可 本体価格一、〇〇〇+税
ISBN978-4-8350-6272-3

●解説——宇野田尚哉(神戸大学国際文化学部准教授)、細見和之(大阪府立大学人間社会学部准教授)

●鼎者——金時鐘+鄭仁+梁石日

●原本提供——金時鐘・鄭仁

●刊行——二〇〇八年二月一括刊行

●定価——本体二六、〇〇〇円+税 ISBN978-4-8350-6268-6

●推薦——金時鐘(詩人)・梁石日(作家)・鶴飼 哲(橋大学教授)・米谷匡史(東京外国語大学准教授)

近刊のご案内

戦後文化運動雑誌叢書⑦

東京南部サークル雑誌集成

〈復刻版〉《全三巻・別冊Ⅱ》

●収録内容——『詩集下丸子』・『くらしのうた』・『石つぶて』・『突堤』他

●体裁——A5判・B5判・上製・総約1,500頁

●別冊——解説・解説・総目次・索引

●別冊——浜賀知彦

●別冊——道場親信

●予価——本体五四、〇〇〇円+税

●刊行——二〇〇九年八月(予定)

●表示価格はすべて税別。

不二出版

〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
FAX03-3812-4464
振替0016002294084